人から人へ
PtoP ピープル ピープル
NEWS vol.43
PtoP：作る人と食べる人が共に支え合う仕組み
2021.04

特集

農民たちが希望を持って運営する農場、カネシゲファーム

KF-RCのスタッフと研修生たち

今月のTOPIC

パレスチナのオリーブオイルを使った和風サラダ

オリーブオイルは洋風のお料理だけのもの…？いえ、違います！
パレスチナのオリーブオイルって、実は和の食材との相性がいいのです。
今回使っているような香りの強い野菜と合わせると相乗効果となって、素材同士の良さがより引き出されます。

<材料>
- □ 季節の葉野菜（セリ、みつば、冬だったら春菊など）：適量
- □ ひじき（乾燥）、豆類（水煮または蒸し豆）、炒りごま：適量
- □ 醤油：オリーブオイル：酢（1:1:0.5の割合）
- □ グランドの塩・マスコバド糖：各ひとつまみ

※サラダの量によって、分量は調整してください。

<作り方>
①ひじきは水で戻し、茹でて水気を切っておく。
②調味料類を混ぜ合わせておく。
③葉野菜を好みの長さに切って、ひじきや豆類と合わせる。
④皿に盛り、②をかける。

レシピ監修：きまぐれや吉田友則シェフ

サラダの具材には、雑穀類を入れても合います。この材料以外にも、色々な食材と合わせて組み合わせを楽しんでくださいね。パレスチナのオリーブオイルの購入はコチラ☞

特定非営利活動法人APLA（Alternative People's Linkage in Asia）
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン（ATJ）
バランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 http://altertrade.jp

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから
特定非営利活動法人APLA

コーヒー生産者と一緒に（左）

ピープルピープル この人に会いたい！
民衆交易でつながる現地の方々を紹介します！

会計でコーヒーの民衆交易を支えるがんばり屋

ベリーナ・ドス・サントスさん
（オルター・トレード・ティモール社 会計責任者）from 東ティモール

東ティモールの首都であるディリに事務所を設けているオルター・トレード・ティモール社（以下ATT）で、会計責任者として働いているベリーナさん。私が初めて彼女と会ったのは2019年5月、ATTの会計処理を「現金主義（※1）」から「発生主義（※2）」に変更するために、東ティモールに行った時でした。

今では、「発生主義に基づいた会計処理を行うことで業績の分析も簡単にできるので、とてもいいです」と心強いことを言いますが、ここまで来るのは試行錯誤の連続でした。

東ティモールでは、現金主義が一般的です。ベリーナさんがディリにある大学で会計について学んだ際、発生主義についても勉強しましたが、仕事では実践していませんでした。当時、私も経理担当になって半年ぐらいだったため、一緒に勉強をしながら、二人三脚でATTの会計処理の改善に取り組みました。

彼女と一緒に働くようになって驚いたのが、とても勉強熱心で、わからないことは理解できるまで何度も聞いてくるところでした。話を聞いてみると、以前はわからないことがあっても相談できる人がおらず、違和感を持ちながらも今までと同じやり方で仕事をしていたそうです。もともと問題意識を持っていたこともあり、質問攻めの日々。おかげで、私の自身の知識もだいぶ増えました。

原価計算、在庫計上、費用計上のタイミング、貸借対照表と損益計算書の関係などなど、彼女にとって初めてのことだらけです。大変じゃないかなと心配して、「大丈夫？」と聞くと、いつも「自分で出来るようになりたいから、もう1回やってみる」と遅くまで仕事をしていました。

最初は、ATTが発生主義に基づいた決算書を作れるようになるのに何年かかるんだろうと思っていたのですが、色々なことをどんどん吸収していくベリーナさんが1年も経たずに発生主義に基づいた決算書が作れるようになったことには、本当に感心しました。その後、私は商品担当に異動したため、直接彼女と仕事をすることはなくなりましたが、しっかりと会計処理ができているようです。

いつか事業計画なども作れるようになりたいと話していたベリーナさん。向上心があり、真摯に仕事に向き合っている彼女なら、近い将来そのような仕事もこなしているのではないかと思います。私も負けないように頑張らないと、とベリーナさんからいい刺激を受けています。

黒岩竜太（くろいわ・りゅうた/ATJ）

※1 現金の受け取りや支払いがなされた時点で、会計処理をする方法
※2 現金の出入りではなく取引が発生した時点で、会計処理をする方法

アジアのコーヒー東ティモールはしっかりとした苦味、ほのかな甘み、やわらかな酸味が特徴です。ミルクとの相性がよく、コーヒーの風味が引き立ちますので、カフェオレなどにもおすすめです。

購入はコチラ

サトウキビ畑に囲まれた緑豊かなKF-RC

特集

農民たちが希望を持って運営する農場、カネシゲファーム

from フィリピン・ネグロス

約5ヘクタールの農場です

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)は、循環型農業の実践・普及を目的とした実践農場(カネシゲファーム:KF)と、農民の育成を目的とした農民学校(ルーラルキャンパス:RC)という2つの顔があります。農場では、養豚事業から出る糞尿を利用し、多品目の野菜を栽培する有畜複合の循環型農業を実践しています。農民学校としては、民衆交易のバランゴンバナナやサトウキビの生産地をはじめとしたネグロス各地の農村から若者を研修生として受け入れ、これまで36名の修了生を送り出しています。

30年前に始まったマスコバド糖とバランゴンバナナの民衆交易は、ネグロスの人びとの自立支援が目的でした。現在のネグロスの農村の状況は、その頃と比べると改善していることは明らかですが、農民が農業で当たり前に暮らしを立てられる状況には未だ至っていません。その理由の一つにネグロス特有の歴史的背景があると言えます。単一作物のサトウキビ農園がひたすら広がるこの島では、多くの人びとが何世代にもわたり地主の下で労働者として働かざるを得ませんでした。KF-RCはそうしたネグロスにおいて、農民として自立する契機を創り出している存在として大きな意義を持ちます。

KF-RCには不思議な魅力があります。これを読んでくださっている方の中にも魅了された方がいらっしゃるかもしれません。農場のとある1日とスタッフの紹介を通して、その魅力にせまってみます。

農場のとある1日

農場の1日は日の出と共に始まります。朝露でひんやりと感じる空気のなか、耳をすませば様々な生き物の声が聞こえてきます。朝一番の作業はコーヒーを淹れるためにお湯を沸かすこと。KF-RCでは料理を担当する人が曜日ごとに決まっており、担当者は少し早起きをしてみんなの分のコーヒーを淹れます。

7時頃、農場中に豚の鳴き声が響き渡ります。午前の餌やりの時間です。養豚担当のジョネルさんが一人で約30頭の母豚と約50匹の子豚の世話をしています。「ここでは地主の下ではない、自分たちの農業ができているんだ」と話す彼は、学校の先生になることが夢でしたが、家庭の事情で大学進学を諦めました。そして2009年にKF-RCの第1期研修生として農場にやってきて、現在までスタッフとして働いています。学校の先生ではありませんが、若い研修生に養豚を教える立場として日々頑張っています。

畑では野菜の収穫作業が進んでいます。マーケティング担当のチータさんが事前にお客さんからの注文をまとめ、その日の収穫量を全スタッフに伝えます。彼女は以前バランゴン生産者協会の委員長でした。バナナの民衆交易が始まった当初から事業に関わり、山々に点在している生産者たちを数日にわたって訪問しては、生活事情について聞き取りをし、民衆交易の意義を伝えてきました。そして、現在もKF-RCでAPLAと一緒に活動ができていることを誇りに思っています。特に若者の育成に関われていることが嬉しいそうです。

子豚を抱くジョネルさん

収穫した生産物はエムエムさんが軽トラックで各家庭やお店に配達します。彼も第1期研修生でした。ここへ来る前は首都マニラの食堂で働いていたのですが、朝から晩まで店主に命令され、少しでも休むと怒鳴りつけられる日々に疲れ果て、ネグロスに帰ってきました。「大学を卒業したかった。なぜ両親はこんなに貧乏なのか何度も恨んだ。それは農民だからだ、とずっと思っていた」と話していた彼ですが、現在は事務局長として農業の楽しさを地域の農民や学校の生徒に力強く伝えています。

KF-RCの魅力

日がすっかり高くなった11時頃に午前の仕事を終了し、お昼ごはんの支度をして、15時頃まで休憩をします。

いつも午後一番に畑に出てくるのは農場長のカルロスさんです。水牛を巧みに操り、畑を耕します。彼は元々サトウキビ労働者でした。毎日地主から指示されたことをこなし、少ない給料でその日暮らしの生活を送っていたのですが、このままでは子どもを学校に行かせることができないと思い、自分で野菜を栽培していこうと決心したそうです。そして、当初では珍しい有機農業を実践する自営農民となりました。「農業は人生そのもの。KF-RCの農業を通じて自分自身も成長しているよ」と、笑顔で語ります。

空がオレンジ色に染まる夕方17時頃、それぞれが作業を終えて家に戻ってきます。テレビを見たり、シャワーを浴びたり、SNSを楽しんだりと各々の夜の時間を過ごして1日は終わります。

スタッフを見ていると、たくさんの苦労を経験してきたからこそ、今ここで農業を楽しんでいるように思います。そして農業の楽しさを知ったからこそ、そのすばらしさを他の若者や農民にも伝えたいと思っているのでしょう。

ここを訪れる人びとは、そんな生き生きとしたスタッフたちに囲まれ、シンプルだけれども豊かな暮らしとおだやかな時間があるKF-RCにいつの間にか魅了されているのかもしれません。

寺田俊（てらだ・しゅん／APLA）

野菜の出荷準備をしている
チータさん(左)とエムエムさん(右)

水牛で畑を耕すカルロスさん

1980年代の国際砂糖相場の暴落により発生した砂糖危機の後、サトウキビ生産だけに頼らない農業に取り組みはじめた元農園労働者、そして山間部のバナナ生産者たちと、APLAは、25年以上にわたり自立に向けた取り組みを続けてきました。現在は、KF-RCを拠点に循環型農業の実践・普及と次世代農民の育成に取り組んでいます。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス